

時間とヴァーチャリティー

ポール・ヴィリリオと現代のテクノロジー・身体・環境

本間邦雄

書肆心水

目
次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

はじめに 13

序章

今日のエレメント 28
——機械論の三段階から、ヴィリリオの「走行圏」、速度の世界へ

第一章

原型としてのトーチカ（掩蔽壕）——ヴィリリオの出发点 46

- 1 『トーチカの考古学』（一九七五年）——「大西洋の壁」の調査研究 47
- 2 本文構成 58
- 3 『トーチカの考古学』（二〇〇八年）「あとがき」について 63

第二章

走行圏世界——速度機械 70

- 1 速度と走行体制 72
- 2 走行術的進歩 75
- 3 走行体制社会 77

SAMPLE
ShoskiShinsui.com

第三章

ヴァーチャル世界の優位と世界の老化 102

——視覚機械による遠隔現前

- 1 視覚機械とヴァーチャル世界の形成 102
- 2 視覚イメージ 108
- 3 ヴァーチャル世界の優位 111
- 4 極の不活性と世界の老化 115

第四章

情報エネルギー炸裂社会とヴァーチャル世界の浸潤 125

- 1 情報エネルギー炸裂社会 126
- 2 内面という虚妄——内部の外部化 133
- 3 スポーツのヴァーチャル化——情報メディアで踊るオリンピック 137
- 4 時間の加速化と「歴史」の変様 147
- 4・1 「時間」、「現実」の加速 149
- 4・2 「歴史」の変様 151

第五章

時間の支配と差異化 158

- 1 速度環境の飽和、過飽和 159
- 2 ヴァーチャル空間の増幅による現実の加速、追い越し 164
- 3 リアル・タイムの構造とテレテクノロジー 169
- 4 時間―多様性へ 176

第六章

事故の博物館、偶有性としての時間 181

- 1 事故の博物館 ^{アクシデン} 181
- 2 時間の偶有性 ^{アクシデン} 188
- 2・1 偶有性、付帯性 188
- 2・2 偶有性の偶有性 ― エピクロスの所説とその解釈 192
- 3 時間と事故 ^{アクシデン} 199

第七章

都市、身体の行方と「恐怖」の管理 208

- 1 前段 ― 体外消化と ^{「脳外消化」} 208
- 2 都市の衰退と変位 ― デパートから量販店、そして通販倉庫へ 215
- 3 ヴァーチャル世界と都市―外 220

第八章

分岐と時間多様性 244

- 4 「ゾーン」化する身体 224
- 5 「世界内存在」から、不安(定)な「自体存在」へ 230
- 6 恐怖の管理 234

終章

脱オリエンテーションの思考——ヴィリリオから道元へ 266

- 1 脱オリエンテーションの思考 267
- 2 『正法眼蔵』と現在 270
- 2・1 而今の山水と古仏の道現成 272
- 2・2 下方と空中 275
- 2・3 日月星辰は人天の所見不同あるべし 277
- 3 道元の思考に学びつつ 281
- 3・1 六神通と今日 282
- 3・2 一水四見とAI 286
- 4 翻身回脳 289

あとがき	301
ヴィリリオオ主要著作一覧	312
初出一覧	315

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

時間とヴァーチャリティー

・ポール・ヴィリリオと現代のテクノロジー・身体・環境

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡例

- ・フランス語引用文の「」は、翻訳では原則として「」場合によってへ」で表示した。
- ・フランス語引用文の大文字（固有名詞以外）は、翻訳では原則として《》でくくった。
- ・フランス語引用文のイタリック部分は、翻訳では原則として傍点を付した。
- ・フランス語の書名（イタリック）は、翻訳では『』で示した。
- ・新聞名、芸術作品名、映画作品名などは『』で示した。
- ・「」でくくった部分は筆者の補足である。
- ・注は、(1)、(2)……の数字で表わし、各章末に配した。

はじめに

二一世紀の前半という時代環境に日々を送っている私たちであるが、先行きはなかなか見通しがた
く不透明というほかはない。ことにこの数年、A I (Artificial Intelligence 人工知能) の日進月歩が大
きく報じられ、ロボットやヴァーチャル・リアリティー (V R) の機能拡張、実用化も進んでいると
言われる。そしてビッグ・データを集積、活用する巨大 I T 企業 G A F A の動向に関するニュース、
コンピュータ・ウイルスやデータ流出のインターネット犯罪などが、毎日のように紙面や報道番組を
賑わしている。

私たちの日常において、特別な場合でなくとも、なにかの風景や人物の写真を撮って送信するとき
は、そのプロセスで画像加工や送信操作を通じて遠隔通信をなしているのであり、リアルな知覚が
ヴァーチャル映像となって伝達される。そのさまが日常的な所作、ふるまい、たしなみとして現況
(アクチュアリティ) となっていると言えるだろう。

こうして、地球の反対側のリアルタイムの映像、事象（遠隔現前）と、ごく近隣の事象、映像が、
“スライド変わり絵”のように入れ替わる。遠隔地と近隣との距離的差異が事実上なくなり、現実のも
ろもろの知覚と各種画像のイメージが、知覚対象としてはフラットな面にほとんど隣り合わせになる
ような格好になっている。

そのうえ、外界の生の現実的知覚で済ませられるなら済まそうとしても、それだけではしばしば社
会生活上、不十分なものとなっている。例えば、スマホなどモバイル機器のカメラ機能により、ヴァー
チャルな文字・画像で映像画面を補強して、複合現実（MR）、拡張現実（AR）として構成するの
が便利なケースはもちろん、その画像は未知な場所や人里離れた一帯などでは必須なケースも生じて
くる。乗用車の自動運転の時代も間近とメディアで喧伝されている。人間社会において、ヴァーチャ
リティーなしではリアリティーが充分に構成されないような局面が各所で広がっていると言えるだろ
う。

“ヴァーチャリティー”に関しては、多義的なので、一応、以下のようにごく簡単に整理しておきた
い。本書で論じるヴィリリオは、おもに①の意味で“ヴァーチャル”（virtual）、“ヴァーチャリティー”
（virtualite）を用いているが、②、③にも言及している。

① リアルタイムの事象の遠隔現前

② リアルタイムの現前画像に、情報・記号を付加した「複合現実」、MR (Mixed Reality)。あるいは「拡張現実」、AR (Augmented Reality)。画像に目的地の記号等を付加するケースから、現前の画像に「ポケット・モンスター」のような仮想現実を付与するケースまで。

③ 「ヴァーチャル・リアリティー（仮想現実）」、VR。ゴーグルを付けて、三次元のヴァーチャル空間に入る場合など。

④ 三次元画像が、現実空間に、立体的輪郭をともなうて浮き出る。例えば、『ブレードランナー2049』（ドゥニ・ヴィルヌーヴ監督、二〇一七年）に登場する、AIシステムのホログラム「ジョイ」。少なくとも人間の三次元画像（視聴覚・相応の触覚）の電送はやがて可能になるだろう。

⑤ また、ディズニースタジオのように、ヴァーチャル・イメージの空間を全身で体感するために、現実の知覚のほうが疑似的であるような、ヴァーチャル空間の現実的な疑似体験を志向するケースもある。

このように今日のあらましのようなものを簡単に連ねてみたが、いわゆる情報化社会において、物の重要性は必ずしも紙面上や報道上の用語や固有名詞の頻度で測られるものでないだろうし、検索の多寡にそのまま比例するものでもないだろう。このことは過去の一定期間の新聞の縮刷版などを

ざっと眺めれば、ある程度実感できる。もちろん、今はあまり目にとまらない事象に、見えない根茎の伸び広がるような展開もありうるだろう。つまり、推移は実感されるにしても、あれこれの現象が表層的か根幹的かはすぐには判然としてこないと考えるのが適切と思われる。

それでは、このような現状のようなものを、どのようにかは判然としないところも多々あるがとにかく私たちの生活、身心のありかたに深くかかわる現況をどう見たらよいのか。いつの時代もそうなのだと言え、それまでだが、現在には現在の特有の事情もあるだろう。それでは、私たちが今生きているこの時代は、ひとまずどのように見ておいたらよいのだろうか。少し立ち戻って考えてみよう。

この時代の大枠をかたちづかったのは、よく知られているように蒸気機関の実用化にともなう一九世紀の蒸気船、機関車・鉄道網の発達から、二〇世紀は自動車、道路網、航空機、空路の発達であり、並行して、電力エネルギーの実用化、無線通信やラジオ・テレビジョンの発明と電信ネットワークなどが思いあたるだろう。そして前世紀の二つの大戦を経て、核兵器と原子力開発が同時代の政治的・社会的・軍事的なトピックの前景に躍り出て今日にいたっている状況は、周知の通りである。

こうして見るだけでも、この間の最先端の科学・工学技術の展開と、その政治的・外交的・軍事的波及に関して、人員・物資の輸送、情報伝達、軍備および軍事的プレゼンスも含め、量的・質的な「速度」の上昇とそのコントロールが大きな眼目になっていたのであろうことが了解されると思われる。そ

のことから目をそらすことはできないだろう。

そこに登場するにふさわしいのは、ポール・ヴィリリオ (Paul Virilio, 一九三二―二〇一八) である。彼は、このような二〇世紀の高度に発達した産業社会、さらにはポスト産業社会と言われる世界状況を、「速度」をキーワードとして本格的に考察した最初の思想家と言うことができるからである。そこで本書では、ヴィリリオの思想を主軸として参照しつつ、これら同時代の諸事象を考察し、ヴィリリオの視座を踏まえて、何が照射できるか、どのような問題が浮かび上がるか、どのような思考が繰り広げられるかを考えてゆきたい。

もちろん、ヴィリリオの残した幾多の書も、およそ二〇世紀の最後の四半世紀から、今日まで四〇数年にわたるわけだが、その間、前述のように世界的に著しい変化、展開もあったと言えるので、ヴィリリオの書にもそれぞれ歴史的制約がある。今日から見れば、その時点での視座から展開される考察、批評という限定的な面もあり、それは押さえておく必要がある。とはいえ、どの時代であれ、書物として事物となつて歴史的に限定されるにしても、一方で、書かれたもの (écriture) としての思考の内実には時代を超える面も含まれる。そこにはぐくまれる思考は、後進の者がその内容を汲み取り、解釈し、批判的に検討して現在の思考にすることによつてのみ開かれるのであろう。ヴィリリオの場合、確かに実際の出来事や事象に言及することも多々あるが、それが一過性ではなく、彼自身の思考に裏付けられた洞察に基づくものであることも少なくないと考えられる。

そこで、不動産の定点、定座標ということではなく、いわば一定の持続を有する中継基地のようなものとして、その基地に随時往還しつつ、またときにはその基地も相対化して対象化しつつ、やがて訪れる二一世紀の第Ⅱ四半期（とそれ以降）に目を向けるためにも、それらの作業を通じて、現代の人間社会およびそれをつつむこの世界の変化、変容をできるだけ把握しつつ考察することを目的とした、と筆者は思った。

さて、そのヴィリリオについては、日本でも翻訳書は一九八〇年代から一〇点以上にのぼり、以上の意味で「速度」の思想家、都市・文明評論家として読者に知られるようになったと思われるが、どのような問題領域でいかに活動をしてきた人物なのか、その概略を本書の冒頭に簡単にまとめて紹介しておきたい。

筆者は以前、ヴィリリオの百科事典の項目を執筆したことがある。ただし、電子媒体のみの発行なので、ここにその項目内容をあらためて引いておくのも無意味ではないと思われる。なお、本書における表記の統一などのため、表現は一部変えてある。

フランスの都市計画家、評論家。一九三二年パリに生まれる。幼少期の戦時中をナントで過ごす。パリの工芸学校に入学し、ソルボンヌの哲学等の講義（モーリス・メルロー・ポンティなど）も受講。

アルジェリア戦争に召集される。一九六九年よりパリ建築学校（E S A）の教授となり、やがて校長も勤める。一九八七年には、設備・住宅、国土整備、運輸三省より、彼のそれまでの著作活動全体にたいして「批評国民大賞」を授与される。

一九五八年からノルマンディーを中心にトーチカなどの戦争建築の実地調査、研究を開始し、『トーチカの考古学』（*Bunker Archéologie*, 一九七五年）にまとめる。一九七七年には『速度と政治』（*Vitesse et Politique*）を著す。同書では、古代アッシリアの騎兵・戦車の疾駆やアテネの軍船の活躍でも知られているように、機動力つまり速度は、その領域を支配する政治権力と不可分である点を確認したうえで、その状態はもとより静止したシステムではなく、それ自体、伸縮可能な力を伝播する走行領域と考えるべき点が強調されている。この著作にいちはやく注目したのがドゥルーズ・ガタリであり、彼らの著作『千のプラトー』（*Mille plateaux*, 一九八〇年）の「遊牧論あるいは戦争機械」の章で再三論じられている。またヴィリリオもドゥルーズ・ガタリの著作や活動に共感を示している。

ところで、このような軍事・速度力を可能にするのは、古来、物資の補給・輸送をつかさどる兵站術（*logistique*）である。ところが第二次大戦後、核抑止力の時代になると、兵器の威力以上に、その潜在的配備力・開発力と情報操作の方に戦略の重点が移る。したがって『戦争と映画Ⅰ』（一九八四年）では二〇世紀の映像と戦争の関係が分析され、映像情報の記録・解析・シミュ

レーシジョンをおこなう「知覚の兵站術」が語られることになる。さらに『視覚機械』(*La Machine de vision*, 一九八八年)では、今日の日常世界に関しても、ヴァーチャルな映像が事物に優先している点に着目し、肉眼で現に人や物を知覚する世界から離れて、画面の世界が第一義的となる事態を論じている。こうして赤外線監視カメラから偵察衛星まで、地上・空中に縦横にはりめぐられ、その惑星的監視態勢のなかでは「拘禁の感情」が今後ますます強まるとヴィリリオは語る(『電脳世界』(*Cybermonde, la politique du pire*, 一九九六年))。

光速度による情報の伝播の世界では、地理的距離の廃棄はもちろん、現地時間(ローカルタイム)の消滅という事態も生じる。そこに君臨するのはリアルタイムの「世界時間」である。これは世界の均一化、相対的「縮小」を意味するが、そのことは、人間の身体が移動体のなかで座席等に「不動化」することから推し量られるように、そのまま身体的自由・能力の相対的拡大を意味するとは言えない。むしろそのなかでは人間の身体的自由が拡張されるというよりも、身体内部が広く開発、投資の対象となるのであり、ヴィリリオは臓器移植など、身体がバイオ・テクノロジーの大きな市場となる点や、無謀な「速度」を求めるオリンピックのドーピング問題にも警鐘を鳴らしている(『沈黙という手続き』(*La Procédure silence*, 二〇〇〇年))。

ヴィリリオに関しては、ただ科学・技術にたいする批判だけであるとか、議論が極端にすぎるといふ評もあるが、テクノロジーの発展についてはその裏面が語られることが少ないので、あえ

てその批判的面を強調する役割を自分は担うとヴィリリオは語る。また不可視の潜在的戦争空間が視覚化されるケースである偶発的事故や人為的破壊に注目し、「偶発すること」(Ce qui arrive)と題して、建築家レベウス・ウッズ (Lebbeus Woods) のインスタレーション『崩壊』など造形作家のオブジェや、二〇〇一年のアメリカ同時多発テロによるツインタワーの崩落や一九八六年のスペースシャトル・チャレンジャー号の爆発など災禍・事故の映像作品の展示を企画し(パリのカルティエ財団現代美術館、二〇〇二〜〇三)、災厄にたいする芸術家の視点を取り入れて、従来のドキュメンタリーや科学的検証とは異なる提示のしかた、反省のしかたを試みている⁽¹⁾。

以上は、二〇〇三年頃までのおもなヴィリリオの活動である。その後、長らく絶版で手に入りにくかったヴィリリオの初期の著作である、『トーチカの考古学』(Bunker Archéologie, 一九七五年)がガリレー社から二〇〇八年に再刊された。初期のヴィリリオの考察対象として注目すべきトーチカ(海岸線などに設置される、コンクリート造りで火器を備えた防御体で、掩蔽壕、第二次大戦のドイツ占領時代は「ブンカー」と呼ばれる)論については、第一章で扱う。また、テクスチュエル社の『電脳世界——最悪のシナリオへの対応』(Cybermonde, la politique du pire, entretien avec Philippe Petit, éditions Textuel, 1996)から一四年後に、同じく同社の対話集『恐怖の管理』(L'Administration de la peur, entretien mené par Bertrand Richard, éditions Textuel, 2010)が出版されている。そこでは、二一世紀に入ってか

らのヴィリリオの関心と思想的展開が語られている。これはおもに第七章で取りあげたい。

さてここで、現代思想におけるヴィリリオの思想的位置づけをおおまかに知るために、また本書で扱う問題圏を概観するために、入り口として、多くの論者に引用されるジル・ドゥルーズの「コントロール管理社会」論（『記号と事件』（一九九〇年）所収）を参照するのがよいと思われる。そこにはドゥルーズがまさにヴィリリオに言及した箇所もあり、またヴィリリオ自身も『電脳世界』（一九九六年）、『情報化爆弾』（一九九八年）、『恐怖の管理』（二〇一〇年）等で今日の社会を特徴づけるものとしてドゥルーズの「管理社会」論に再三言及しているからである。

ドゥルーズは、権力の歴史的な三つの形態として、「君主型」、「規律型」、「管理型」を挙げている。「君主型」は王を頂点とする古典的形態と考えてよいだろう。「規律型」の「規律社会」については、ミシェル・フーコーは大規模な監禁・訓練の環境を整備する一八・一九世紀に位置づけた。「規律社会」にあてはまる施設は監獄だけではない。軍隊、学校、工場、病院なども同工異曲である。しかし二〇世紀も末には、その「規律社会」（*les sociétés disciplinaires*）は「コントロール管理社会」（*les sociétés de contrôle*）に移り代わろうとしている。ドゥルーズは以下のように語っている。

こうして規律社会（*les sociétés disciplinaires*）にとってかわろうとするのが管理社会（*les sociétés*

de contrôle) にはかならないのである。「管理」^{コントロール}とは、新たな怪物を名ざすために「ウィリアム・S・バロウズが提案した名称であり、フーコーが私たちの近い将来として認めているのが、この「管理」なのだ。ポール・ヴィリリオもまた、いわば戸外で行使される超高速の管理形態を分析し、これが、閉じられたシステムの持続において作用した旧来の規律にとってかわるだろうと述べている。途轍もない規模に達した薬品の生産や、組織的な核兵器開発や遺伝子操作などは、たとえそれが新たなプロセスに介入してくる運命にあったとしても、あえて引き合いに出すにはおおよばない。もっとも冷酷な体制はどれなのか、あるいはいちばん我慢しやすい体制はどれなのかということは考える必要がない。冷酷な体制でも、我慢できる体制でも、その内部では解放と隷属がせめぎあっているからである。例えば、監禁環境そのものともいえる病院の危機においては、部門の細分化や、デイケアや在宅介護などが、はじめのうちは新しい自由をもたらしたとは言え、結局はもっとも冷酷な監禁にも比肩しうる管理のメカニズムに関与してしまったことも忘れてはならない。恐れたり、期待をもったりしてはならず、闘争のための新しい武器を探しもとめなければならぬのである。⁽²⁾〔強調は原著書、傍線は引用者〕

このように、大量の情報をデータ処理して蓄積するコンピュータ・テクノロジーが主導し、メディアを通して映像、言論、コミュニケーションを操作する「管理社会」の時代に、私たちは紛れもなく

突入している。このような社会をどのように受けとめ、またいかに距離をとることができるか、どのような対応がありうべきか、何が考えられるかが問題となるだろう。筆者には、このようなドゥルーズの呼びかけ、思考にたいして、ヴィリリオは一連の著作において随所で呼応し、応答しているように思えてならないのである。

またヴィリリオの文^{エクリチュール}章からは、しばしば、教育的に説いて聞かせると言うよりも、どちらかと言えば常識的な見方をくつがえし読者を挑発する印象を受けることがある。例えば通常の図と地を逆転するような見方、考え方を打ち出す。それも新しい問題圏の創出、提示の意味合いもあつて意図的であるだろうし、ヴィリリオの文^{エクリチュール}章の特徴ではある。

しかもヴィリリオの著作では、その時点の世界的にアクチュアルな政治、経済、社会、軍事的問題、事件に言及される場合が多い。したがって、他の思想家の場合もそうであろうが、とりわけヴィリリオの思想をまず読み取り、説明するにあたっては、その思想圏からの触発をわれわれの馴染みの世界に着地させつつ、ときに眼前に浮上させ、その周囲の地上・空中風景ともども描くようにして、その運動世界の特徴や輪郭を浮かび上がらせる必要があるのではないかと思われた。

そのため、同時代の事象をとらえるその考え方をできるだけだけわかりやすく説明するためには、一般的な思潮や前史、あるいは扱われる問題系に関わる前提事項を前後左右に並べたり、またヴィリリオ

の語り開く方向に沿った、他の思想家の考え方を配置したりする必要があると思われた。また筆者を含めてだが、情報化社会とか人工知能とかいうことばを発すると、なにかわかった気になって、そこで思考停止になるおそれがあるので、その成り立ちを可能な範囲でおおまかにでもつかんでおく必要があると思われた。そのため、序章において、前記のドゥルーズのほかにも、機械の三段階を論じた坂本賢三（『機械の現象学』一九七五年）の所論を踏まえて、道具・機械の基本的な考察を試み、本論への橋渡しとしている。例えば機械の原初型に関わる「体内消化」・「体外消化」の概念など、本論でも参照系として随所に援用している。

なお、ヴィリリオもまた思想家として例に漏れず、広く世界中の同時代人に向けて語っているのであり、取りあげられる問題系やトピックも科学技術に関わる以上、彼の言述は原則的に世界共通の平面に展開する。そのため、筆者がヴィリリオの文章を受けて連想した事例やわが国などに当てはまるケースを考察して展開した内容も随所に配置した。

譬えて言えば、ヴィリリオを主要な思想圏として、そこから吹き寄せる風をわれわれができるだけ受けとめて、あるいはその風に思いのままに乗って、風の吹き行く先のさまを、吹き払う風景を考えてみたかどうかなど、筆者なりに、ともすると馴染みの風景と異なると思いがちな世界にこんな趣向の風も如何かと行き渡らせるべく、できるだけ試みたつもりであるが、むしろ速度のテーマとは逆に、煩雑、混迷な隘路にいつまでも遅滞し途方に暮れることも多かった。

それでもヴィリリオを主要な軸として読みつつ、おもに二〇世紀第IV四半期からの近過去を筆者なりに回顧し、現在の状況を多面的に考察し、第七章、第八章、終章などでは、筆者の見解も提示した。とくに終章では、ヴィリリオの言う「脱オリエンテーション」（方向性の脱構築）を追究するならば、いろいろな先人の書や今日の学術書など参考になるものは数多あると思われるが、筆者の知る限りでは道元の『正法眼蔵』にまさる書は考えられず、その書に依りつつ、また照らし合わせつつ、この脱オリエンテーションの問題の考察を試みた。本書において二〇世紀の足がかりを保ちつつ二一世紀の第II四半期以降を遠望する際のなんらかの心構えに資する素描の試みが、いくばくかなされたかどうかは読者諸姉諸兄のご判断を待つしかない。

なお、ヴィリリオの著作をはじめ、引用した文献の翻訳書はできるだけ参照し、参考にさせていたが、本書においては表記や前後関係、文章の統一などのため、多くの場合、あらためて拙訳を試みたことをお断りしておく。なお参照する場合の便宜のため、引用箇所で翻訳のあるものは、注に翻訳書の該当ページを記した。

注

- (1) 小学館 DVD-ROM 版『スーパー・ニッポニカ』項目「ベリリオ」、二〇〇四年発刊。
- (2) Gilles Deleuze, *Toutparlers*, Minuit, 1990. pp. 241-242. ジル・ドゥルーズ『記号と事件』（宮林寛訳、河出書房新社、一九九二年）、二九二頁。
- 〔ウィリアム・S・〕パロウズ（一九一四～一九九七）は、アメリカ一九五〇年代のビート・ジェネレーションを代表する作家の一人。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com